

協調学習を導入した授業における Facebook の利用： 「探求の共同体」フレームワークによる学習コミュニティの評価

Use of Facebook in Collaborative Learning Classes -Evaluation of Learning Community Using “Community of Inquiry” Framework-

山田 政寛^{*1}, 合田 美子^{*2}
Masanori YAMADA^{*1}, Yoshiko GODA^{*2}

^{*1}九州大学 基幹教育院

^{*1}Faculty of Arts and Science, Kyushu University

^{*2}熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター

^{*2}Research Center for Higher Education, Kumamoto University

Email: mark@mark-lab.net

あらまし：本稿では Facebook を利用した協調学習を導入した、2 年間の授業実践について、2012 年度受講生による学習コミュニティの状態受容に関する分析結果を報告する。具体的には協調学習を導入した2つの授業にて Facebook を授業外学習支援のために利用し、「探求の共同体」尺度を用いて、主観的評価を行ったところ、学習コミュニティの状態が認知的・教授的に高く評価された。

キーワード： 協調学習, Facebook, Social Network Site(SNS), 探求の共同体(Community of Inquiry)

1. はじめに

近年、高等教育における協調学習を導入した授業において、Social Networking Services (SNS)を使う試みがされている。協調学習では、人間関係を構築・維持しながら、グループメンバー相互に意味交渉を行うこと、作業の分業、知識や情報、活動内容の共有と統合することといった生産的な学習コミュニティが形成されることが求められるが、SNS がこれら活動の支援において効果が期待されている[1]。本稿では対面で行われる協調学習を導入した授業に対して、授業外学習の支援のために Facebook を活用した、2 年間の実践について述べ、「探求の共同体」フレームワーク[2]に沿った、2012 年度受講者による主観的評価の分析結果について経過報告する。

2. 授業の内容と Facebook による授業外支援

授業外学習支援の環境として、Facebook を利用した授業は2つであった。1つはディスカッションスキルを習得することが目的とした授業であった。仮想の日本政府として、現在我が国が抱えている社会問題について政策を打ち、解決を検討するという文脈を与えている。解決する社会問題（議題）は教員から3つのテーマに絞るように指示される以外、指示はなく、受講者ら自身で決定した。決定したテーマ毎にグループを組むこととしたため、3 グループ形成された。グループ内で社会問題に関する現状分析、政策立案などを検討し、ディスカッションは他のグループメンバーと行う。具体的には各グループから1名ずつ出し、3人1グループでディスカッションを行うものとなっている。ディスカッションの前に当日の学習目標を設定し、ディスカッション後にリフレクションを行い、学習目標の達成度、その理由、次回までに改善することを検討し、発表してもらう。現状分析、政策立案に伴う情報収集やロジック構築は授業外にてチームで行い、共有を Facebook 上で行

うように指示した。またディスカッション後に行うリフレクションの内容も Facebook 上で共有するように指示した。

もう1つの授業は企画提案型のプロジェクト学習を取り入れたものである。具体的には図書館内に設置されたラーニングコモンズをより充実化させるための企画を図書館職員に提案するものである。15回の授業の5回分を知識習得編とし、企画を作り上げるために必要な、関連知識を教える目的で行われた。後半の9回分をプロジェクト編とし、受講者たちが知識習得編で学んだ内容に基づいて、企画立案を行う。授業開始時に教員が進捗を確認した。最終回に図書館職員に向けて企画提案プレゼンテーションを行う。知識習得編では、授業で扱った内容に関して、内容の概要、自分の考え、質問等を書くミニッツペーパーを Facebook 上に書き、共有するよう指示した。プロジェクト編では、授業内で完了できなかった活動や授業外に行うことを計画した活動を Facebook で行うよう指示した。両授業ともに、教員は授業資料、補助資料のアップロード、ミニッツペーパーやリフレクションへのコメントを行い、受講生の活動そのものには介入していない。受講者から質問があれば、随時、対面でも Facebook 上でも対応は行った。

両授業とも2011年度、2012年度に開講したものであり、Facebook グループでは年度に分けていない。つまり、各年度受講生は同じグループに所属することになる。その理由は、(1)2011年度にてそれぞれの授業で、活動のモデルなどが合った方が、より充実した学習活動になったという指摘が受講生からあったためである。両授業共に事前事後で質問紙、事後にインタビューによるデータを収集した。

3. 「探求の共同体」フレームワーク

「探求の共同体」は学習の情意面に影響するとされる社会的存在感、議論の観点を提示するなど、学習

成果に直接影響する認知的存在感, ルールの伝達に関わる教授的存在感から構成される. 社会的存在感とはもともと社会心理学の研究知見であり, 「メディアを介した相互作用によって, 相手がそこにいると感じられる程度」と訳される[3]. 例えば, 社会的存在感は絵文字の利用や実名で相手を呼ぶといった親近感(Intimacy)と返答のスピードなど即時性(Immediacy)が関係しているとされる[4]. 認知的存在感とは「批判的思考能力など, 高次の能力育成に関係する談話を継続させる支援, イベント, またその知的支援環境」と定義される[2]. 例えば, 問題を再認識する発言, 相手と自分の意見を統合させる発言は認知的存在感に当たる. 教授的存在感は「学習過程や成果を管理・監視をしながら, 学習者のコミュニケーションを方向付けること」と定義される[2]. 例えば発言のルールを作る発言や各種作業の期限を決める発言などが含まれる. 3つの存在感により, 「探究の共同体」は活性化し, パフォーマンスが高くなるとされる. 本稿では, Arbaugh, et al(2008)[5]が開発した「探求の共同体」尺度を用いて, 本授業における「探求の共同体」の状態について, また独自項目として, コミュニティの所属感について事前事後の主観的評価データを分析した結果を記載する.

4. 結果

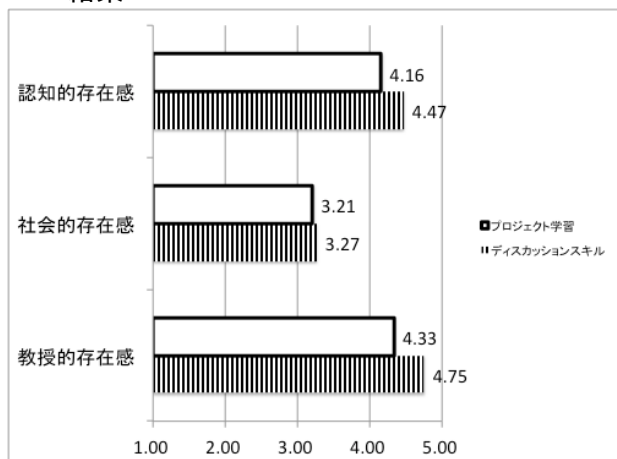


図1 「探求の共同体」尺度による各存在感の評価

それぞれの授業の2012年度受講者は, ディスカッションスキルが9名, プロジェクト型学習は5名であった. 授業最終回後にWebによる質問紙にてデータ収集を行った. 図1にディスカッションスキル, プロジェクト型学習における「探求の共同体」尺度の結果を, 図2ではコミュニティ所属感の結果について示す. それぞれ平均値で記載する. 「探求の共同体」尺度による評価では, 認知的存在感, 教授的存在感ともに高く受講者に受容されていることがわかった. 社会的存在感は他に比べ, 低めであることが示された. コミュニティの所属感, 両授業ともに授業期間最後には高まったことが示された. 自由記述でもTwitterでフォロー・フォロワー関係になる, 授業後に夕食を食べるなど, 人間関係の形成が行われてい

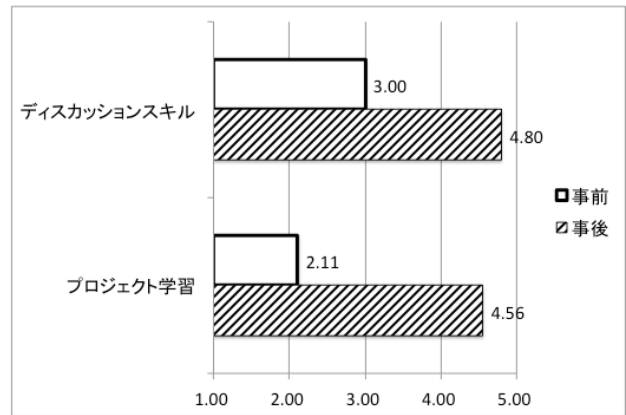


図2 コミュニティの所属感に関する結果

ること, Facebookについても, 「Facebook上の「いいね」ボタンを押すことで他のメンバーの意見を忘れて参考にした」, 「日常的なツールであるため, 学習活動にも自然に入っていくやすい」, 「メンバーがどういう人なのかわかり, 活動しやすかった」といった意見が多々確認された.

5. 今後の課題

Facebookを利用した協調学習支援を行い, 学習コミュニティの形成に関する受講者の主観的評価について分析したところ, 社会的存在感が他の存在感より低いものの, 実際の行動面では人間関係を形成する行動が行われ, 学習活動そのものに関わる認知的・社会的存在感も高まっていることが確認された. また日常的なツールであるFacebookの活用が学習コミュニティの形成・維持において有効である可能性が示された. 今後は発言データを3つの存在感に分類し, 尺度の関係を分析すること, 2011年度受講生のデータ分析, 2011年度受講生と2012年度受講生との関係に関する分析, Facebookの機能による効果の分析, インタビュー・自由記述データの分析を進め, より知見が深くなるよう研究を進めていく予定である.

参考文献

- (1) Lampe, C., Wohn, D. Y., Vitak, J. et al.: Student use of Facebook for organizing collaborative classroom activities, *International Journal of Computer Supported Collaborative Learning*, 6, pp.329-347 (2011)
- (2) Garrison, D. R. & Anderson, T.: "E-LEARNING in the 21st century - A Framework for Research and Practice", RoutledgeFalmer, London, UK. (2003)
- (3) Short, J., Williams, E., & Christie, B.: "The social psychology of telecommunications", John Wiley & Sons, London, UK. (1976)
- (4) Gunawardena, C.N.: "Social Presence Theory and Implications for Interaction and Collaborative Learning in Computer Conferences", *International Journal of Educational Telecommunications*, 1(2/3), pp.147-166. (1995)
- (5) Arbaugh, J.B., Cleveland-Innes, M., Diaz, S.R. et al. "Developing a community of inquiry instrument: Testing a measure of the Community of Inquiry framework using a multi-institutional sample", *Internet and Higher Education*, 11, pp.133-136 (2008)